

感性と悟性の共通の根

——ハイデガー『カントと形而上学の問題』とカント『判断力批判』の交差点

(※本稿は 2017.09.12 時点の推敲中の草稿です。発表原稿は当日配布いたします。)

群馬県立女子大学 長坂真澄

masumi.nagasaka@mail.gpwu.ac.jp

ハイデガーの『カントと形而上学の問題』（以下「カント書」と略）は、カント哲学を超越論的構想力および超越論的図式論を中心に捉え直す、画期的なものであった。しかし、感性と悟性の共通の根を超越論的構想力に求め、その超越論的構想力に由来する悟性を理性とさえ同一視することを主張する<sup>1</sup>カント書の読解は、カントにおける理性の統一的役割を構想力に移し替えてしまう強引さを持っており、その点でカント哲学の建築術に根本的に反する危険を孕んでいた。

本発表の目的は、カント書が示した、超越論的構想力を感性と悟性の隠された共通の根とする読解を、『純粹理性批判』とではなく、むしろ『判断力批判』と対照させて再考察することによって、この解釈が持ちうる新たな可能性を探究することにある。というのも、『判断力批判』こそ、『純粹理性批判』が明言していなかった、感性と悟性の共通の根について、一つの可能な答えを与えてくれるように思われるからである<sup>2</sup>。

本発表が辿る行程は以下のとおりである。

まず第 1 節にて、本発表の前提となる議論として、カント書が展開する解釈の要点のうち、本論にとって重要な四点を振り返る。その上で、なぜこの解釈が（後のハイデガー自身が形容するように）「暴力性」(Gewaltsamkeit)<sup>3</sup>を持っているのかを確認する。

より詳しくは、以下の順で議論を進める

- 1) ア・プリオリな総合判断が存在論的認識（存在了解）として解釈されること、その仕組みが超越論的時間規定としての図式を明らかにする超越論的図式論によって明らかになること
- 2) 自己触発として時間が根源的に有限なものとして捉えられること
- 3) 感性と悟性の共通の根が構想力であるとされること、またそのことが孕む問題

---

<sup>1</sup> Cf. GA3 151, 後述。

<sup>2</sup> 本論で見るように、直感的(ästhetisch)反省的判断が問題となるとき、認識判断の場合におけるような感性と悟性の分断はもはや消滅する。ここでこそ、感性と悟性の共通の根として構想力を語るハイデガーの説が、説得力のあるものとなるように思われるのである。

<sup>3</sup> 1950 年の第二版への前書き。GA3 XVII.

- 4) 理性も構想力から捉え直され、超越論的理想が超越論的構想力の産物とされること、またそのことが引き起こす問題

次に第 2 節にて、カント書における解釈が、『純粋理性批判』が語る認識判断ではなく、むしろ『判断力批判』第一部第一篇第一章「美の分析論」が語る直感的反省的判断においてこそ、成り立つと考えられる理由を説明する。

その際、以下の順で議論を進める。

- 1) ア・プリオリな総合判断である直感的反省的判断における超越論的図式論（前節 1 に対応）
- 2) 概念なき図式化において起こる自己触発としての時間（前節の 2 に対応）
- 3) 直感的反省的判断においては〈感じること〉が〈考えること〉と一体であること（前節の 3 に対応）
- 4) 直感的反省的判断において構想力が理想を描くことができること（前節の 4 に対応）
- 5) あらゆる規定的判断は反省的判断を前提すること、また、認識判断はその原始的段階においては直感的反省的判断として捉えられること

最後に第 3 節では、上記の解釈の可能性にもかかわらず、なぜハイデガー自身はカント書での解釈を『判断力批判』に積極的に結び付けることをせず、カント書での議論を、カントよりもむしろニーチェを対話者として、発展させてゆくのかを考察する。

詳しくは次の手順で議論を辿る。

- 1) ハイデガーにとって、カントにおいては有限性が十分に根源的に捉えられていないこと
- 2) 崇高判断と目的論的判断の批判は、ハイデガーの言う至高的存在者の学にまだ属すること
- 3) 『判断力批判』第一部第一篇第一章の美の分析論は、むしろニーチェの芸術論へと接続されること

## 第 1 節 カント書が展開する解釈のうち特徴四点及びその「暴力性」の所在の確認

- 1) ア・プリオリな総合判断の存在論的認識（存在了解）としての解釈及び超越論的図式論のハイデガーによる読解

知られているように、カントの『純粋理性批判』は、ヒュームの経験論によって、客観的必然性を持たない単なる習慣的原理であるとされた因果律を、ア・プリオリな原理として救うことを一つの動機として書かれた。そのためにカントは、ア・プリオリな総合判断（たとえば「生起するあらゆるものには原因がある」という命題）が可能であることを主張し、このような判断が可能となる仕組みを提示した。この仕組みにおいて重要な役割を果たしたのが、超越論的図式論であった。カントにおいて、認識は直

観と思考の結合であり<sup>4</sup>、ア・プリアリな総合判断は、非経験的直観と非経験的思考の結合、すなわち、純粋直観と純粋思考の結合として捉えることができる。ここで、図式とは何か。それは、カントの言葉を用いて言えば、一方で「概念を感性的にすること」([die] Begriffe sinnlich zu machen)、他方で「直観を悟性的にすること〔自らに理解可能にすること〕」([die] Anschauungen sich verständlich zu machen)を遂行するものである<sup>5</sup>。ハイデガーが的確に言うように、図式は「純粋概念の感性化」(Versinnlichung der reinen Begriffe) (GA3, §19, S. 91)を行う。よって図式こそが、直観と概念の媒介者となり、超越論的図式論のみが、純粋直観(時間・空間)と純粋思考(純粋悟性概念)との結合がいかんして可能であるかを説明することができるのである<sup>6</sup>。

超越論的図式論を介して可能となるア・プリアリな総合判断が、ハイデガーの読解において、存在論的認識であるとされるのは、それがいかなる存在者の認識でもなく、むしろ、存在者の認識の可能性の条件、すなわち、存在者の存在に関わるものだからである。確かに、たとえば火という原因の結果として煙が出るという認識において、火や煙といった存在者の認識(現象の認識)と、火や煙の存在自体に関わる因果性の認識(範疇の認識)は、まったく次元を異にするものである。

よく知られているようにハイデガーは、総合の働きを構想力に基ける『純粋理性批判』第一版の範疇の超越論的演繹に依拠して説明する。そこでカントは、「直観における覚知」(Apprehension in der Anschauung)、「構想力における再生」(Reproduktion in der Einbildung)、「概念における再認」(Rekognition im Begriffe)という三つの総合について語るが、これらの総合のそれぞれが、それはそれで構想力の純粋総合によるものであることが明らかになる<sup>7</sup>。というのも、上述のように、本質的に異他である純粋直観と純粋思考を結合することができるのは、媒介者である図式のみであり、そこにこそあら

---

<sup>4</sup> Cf. KrV A15;B29-30, A50f.;B74f.

<sup>5</sup> KrV A51;B75.

<sup>6</sup> ここで、ハイデガーのカント解釈の独自性が際立つのが、範疇の解釈である。カントを読む限りでは、範疇とは純粋悟性概念であり、Notioとも呼ばれる(カントは“Notio”を次のように定義している。「概念は経験的概念か純粋概念のいずれかであり、純粋概念は、それが(感性の純粋形像のうちにはなく)ただ悟性のうちに起源を持つかぎり、悟性概念(Notio)と名づけられる」(KrV A320;B377))。しかし、1927-28年マールブルク大学冬学期講義においてすでに、ハイデガーは、範疇とNotio及び純粋悟性概念という語のニュアンスを区別していた。この区別は、ハイデガーが、形式論理学(一般論理学)と超越論的論理学を区別するカントの立場を高く評価することに由来する。彼にとって、カントの偉大な功績は、何よりも、ア・ポステリオリな総合判断(経験的心理学の対象)でも、ア・プリアリな分析判断(形式的論理学の対象)でもない、ア・プリアリな総合判断(超越論的論理学の対象)を見出したことにある。超越論的論理学は、論理学とは言え、単なる悟性の学問(形式的論理学がそうである)とは明確に区別される。それは、直観と結合される思考を扱うのだ(cf. GA25, 167f., 252f., 266f., 284f., 301, 322)。範疇は、形式的論理学の枠組みで理解されうものではなく、時間という純粋直観との関わりにおいて初めて実在的なものになるという限りにおいて、単なる純粋悟性概念(つまりNotio)から区別されるのである。

<sup>7</sup> cf. KrV A98-115.

ゆる総合の起源があると考えられるからである。直観における覚知や概念における再認（超越論的統覚の統一性）も、純粹構想力による総合を前提しているのである<sup>8</sup>。

ハイデガーのこうした解釈が説得力を持ちうるとすれば、それは、カントが単に超越論的感性論の内部のみではなく、超越論的論理学の内部でこそ、時間の問題を扱っているからである。つまり超越論的論理学は、単なる悟性の論理学（形式的論理学）ではなく、純粹悟性概念と純粹直観（時間）との結合の仕組みを論じる論理学なのである。

カントは超越論的論理学、超越論的分析論の「原則的分析論」において、範疇（実体性、因果性など）を現象へと適用する際に媒介の働きをなす図式を、超越論的時間規定として記述している。範疇が単なる空虚な枠組みでなく、実在性を持つものとして我々にあらわになるのは、時間と結合することによってのみである<sup>9</sup>。ハイデガーは言う。図式論こそが、存在論的認識の発生(Geschehen)を 作動させる、と (cf. GA3 89)。

超越論的時間規定としての図式が純粹悟性概念（思考）と時間（直観）との媒介者となることができるのは、それが一方では純粹悟性概念と同種性を持ち、他方で時間と同種性を持つからである。カントによれば、範疇と超越論的時間規定が同種であるのは、それらがともに「普遍的」で「ア・プリオリな規則に基づく」からである<sup>10</sup>。しかしハイデガーは、範疇と超越論的時間規定が同種であることは、範疇がすでに時間に根源を持っていることの証左であるとする。

---

<sup>8</sup> よく知られているように、カントは第二版では、総合の働きを構想力ではなくむしろ悟性に帰す(cf. KrV B133; GA3 §29)。第一版では、純粹構想力が、上記の三つの総合の根源であると同時に、上記の三つの総合の一つでもあるという二重の役割を担っていたが、第二版ではその複雑さが修正されるのである。とはいえハイデガーの解釈によるならば、これは、以下のことを意味することになる。超越論的哲学において超越論的構想力なるものを発見したカント自身が、経験的心理学と形式的論理学の二項対立にまだ囚われていた、それゆえ、超越論的構想力を経験的心理学的に（経験的構想力として）捉えられることを恐れるあまり、形式論理的な立場へと後退したということである(cf. GA25 318, 429)。

<sup>9</sup> 「したがって、範疇は、図式なくしては、概念のための悟性の機能に過ぎず、いかなる対象をも表象しない」(KrV A147;B187)。範疇は、図式なしには、対象をまったく表象できないのである。たとえば、量の範疇（単一性・数多性・全体性）は、時間という形式のもとで加算の手続きを捉えることを可能にする、時間系列という超越論的時間規定によって、はじめて実在的に理解可能なものとなる。質の範疇は、時間内容（時間の内容が満たされているか否か）という超越論定時間規定によって、実在性（時間の内容が充実されている）、否定性（時間の内容が空虚である）、制限性（時間の内容が制限されている）へと分類される。さらに、関係の範疇は、時間順序（時間秩序）という超越論的時間規定に応じて、実体（実在性が時間のうちで持続すること）と属性（実在性が持続しないこと）、原因性／依存性（規則に従った時間継起、すなわち、A が起これば常に B が起こるということを伴う）、相互性（時間的共存において、複数のものが同時に存在し、互いが互いの原因となって作用し合う）へと別れる。最後に、様相の範疇は、時間総括 という超越論的時間規定によって、可能性（対象が或る任意の時間において知覚と結合しうること）、存在性すなわち現実性（対象が或る特定の時間に 現実的な知覚と結合していること）、必然性（対象がすべての時間において知覚と結合していること）へと分類される(cf. KrV A145;B184; GA3 104)。

<sup>10</sup> 「ところで、超越論的時間規定は、（この規定の統一性を構成する）範疇と同種のものである。それは、超越論的時間規定が、普遍的であり、ア・プリオリな規則に基づくものである限りにおいて、そうなのである」(KrV A138;B177f.)。

以上で、一方に時間があり、他方に純粹悟性概念があり、これが時間の超越論的規定という図式を介して、範疇を実在的に定義することを可能にすること、よってハイデガーにとって、この超越論的時間規定を産出する産出的構想力こそが、存在者の存在を生み出すものであることが確認された。

## 2) 自己触発として捉えられる根源的に有限的な時間

さて、ハイデガーはさらに、超越論的構想力からこそ、時間が湧出するのであり、この「仕方」(Art und Weise)が自己触発として捉えられることに着目する<sup>11</sup>。この自己触発という考え方からこそ、ハイデガーは、カントの時間論が根源的に有限性を捉えることに成功していると見るのである。

カントは、時間を「心の変様」(Modifikation des Gemüts)(KrV B291)として捉える。それは、心が、何らかの存在者を受け取ることによってこうむる変様ではない。それは、「いかなるものでもないもの」を受け取ることによる変様である。ハイデガーはそれを、「現前するもの」(ein Anwesendes)を「受け取ること」(Hinnehmen)から区別する<sup>12</sup>。時間とは、存在者ではなく、存在が与えられていることによる心の変様なのである。いかなるものも外部から与えられているわけでもなく心自身の変様することから、カントはこれを、心の心自身による触発と捉える<sup>13</sup>。ハイデガーはこれを、「純粹な自己触発」(reine Selbstaffektion) (GA3 188 ; cf. KrV A77;B102) = 「自己が自己へと関わる(sichselbstangeben)こと」であると言う。これは 1927-28 年マールブルク大学冬学期講義では、「氣遣い」(Sorge)と結び付けられ<sup>14</sup>、カント書では、「主観性の本質的構造」と捉えられている(GA3 189)。

ハイデガーにとって、この自己触発こそ、時間を、そして存在を、根源的に有限的なものとして捉える可能性を開く概念である。というのも、これこそ、無限の時間(永遠の時間)の派生形態ではない形で有限的な時間を捉えることを可能にするからである。カント自身は、根源的な時間と派生的な時間(ハイデガーの言う「通俗的な」時間)を区別しないが、ハイデガーはここに、根源的な時間性の記述を見出すのである。

## 3) 感性と悟性の共通の根が構想力であるとされること、またそのことが孕む問題

---

<sup>11</sup> Cf. GA3 173.

<sup>12</sup> Cf. GA3 188.

<sup>13</sup> 「もし我々が外部感官について、我々が外部的に触発される限りにおいてのみ、外部感官を通して客観を認識するのだということを認めるならば、我々は内部感官についても、以下のことを承認しなければならない。つまり、我々が内部的に我々自身によって触発されるようにのみ、内部感官を通して我々自身を直観するということを、である」(KrV B156)。

<sup>14</sup> Cf. GA25 397.

さらに、ハイデガーは、純粹直観、純粹悟性の働きそのものが、純粹構想力によるものであるとする。純粹直観（すなわち時間）が構想力によるものであることは、カントが時間を *ens imaginarium*（構想的存在）と呼んでいることから、裏付けられるとされる<sup>15</sup>。純粹悟性の働きが構想力によるものであることは、カントが図式論を「悟性の所作」(*das Verfahren des Verstandes*)と呼んでいることから、看取されると言う<sup>16</sup>。ここで、超越論的統覚も時間性を持つのかということが問題になる。ハイデガーは1927-28年マールブルク大学冬学期講義で、超越論的統覚（純粹悟性の働き）と時間（純粹直観）がつながっていることを示して初めて、自らの共通の根についてのテーゼが成り立つ、と認めており(cf. GA25 359)、それは後のカント書において詳細に検討される。カント自身は、超越論的統覚と時間を切り離すが、ハイデガーは、超越論的統覚は、通俗的な意味での時間から切り離されるのみであり、根源的には時間的であるのだと主張する<sup>17</sup>

こうした解釈<sup>18</sup>は、カント哲学からの乖離を刻印している。確かに、ハイデガーがその炯眼をもって指摘するように、超越論的構想力の発見は、カントの偉大な功績である。しかし、他方で、彼が認識の限界設定をなすという巨大な課題を持っていたことも、忘れることはできない。思考と直観が分断されているからこそ、空虚な思考（直観と結合しない思考）と認識（直観と結合した思考）の区別ができる。言い換えれば、カントにとって、感性と悟性の根は、「未知」にとどまる。もしもこれが認識にもたらされてしまうならば、それはもはや、カント哲学が設定する認識の限界を超えることになる。

---

<sup>15</sup> KrV A291f.;B347f., Cf. GA03, 143. ここでハイデガーは、カントにおける四つの無の分類の議論(A290;B347ff.)を参照している。第一に、対象のない空虚な概念としての無があり、これをカントは *ens rationis*（思惟的实在）と名付ける。その例は、本質体(Noumena)である。第二に、概念に対する空虚な対象としての無があり、これをカントは *nihil privativum*（欠性的無）と呼ぶ。カントの挙げる例は、影、寒気である。第三に、対象のない空虚な直観としての無が挙げられ、これが *ens imaginarium*（構想的实在）であり、その例が、純粹空間及び純粹時間である。第四に、概念のない空虚な対象としての無が、*nihil negativum*（否定的無）と呼ばれ、自己矛盾する概念の対象がその例とされる。カントは言う。「直観の単なる形式」、すなわち時間と空間は、「実在的なものなくしては、いかなる客観も形成しない」と(A292;B348)。

<sup>16</sup> ハイデガーによれば、そもそも純粹思考も、純粹構想力の働きである(GA03, §29)。そのことを彼は、カント自身が用いる言葉「これらの図式による悟性の所作」“*das Verfahren des Verstandes mit diesen Schmaten*” A140;B179

「われわれの悟性の図式化」“*Dieser Schematismus unseres Verstandes*“ A141;B180-181 cf. GA03, 151 によってあらわされているとする。

<sup>17</sup> ただし、カントにおいて、主観性の本質構造をなす超越論的統覚（「私は考える」）は、内容のない単なる形式であり、時間性を持たない。この主観性に時間性を帰すことは、カントが純粹理性の誤謬推理としたものにほかならない(cf. KrV A341-408;B399-435)。ハイデガーはこの点を承知した上で、カントが「私は考える」と時間性を引き離すのは、ただ、非本来的な時間性、すなわち内時間性として時間を捉える場合においてのみだと主張する。つまり、根源的で本来的な時間性として時間を捉えるなら、超越論的統覚（「私は考える」）は時間的であることになり、その際誤謬推理に陥ることはないとするのである(cf. GA3 193)。

<sup>18</sup> すなわち、範疇が純粹悟性概念及び *Notio* と区別され、時間に起源を持つとされること、さらに、超越論的統覚さえ時間に起源を持つとされること。

#### 4) 構想力をその根源として捉え直される理性及びこの解釈が引き起こす問題

ハイデガーは、感性と悟性の根を構想力に求めるだけでなく、さらに、理性をも構想力から発するものであるという解釈を展開する。カントにおいては、悟性が概念を通して客体の多様を統一するだけでなく、理性がそれら概念の多様を、理念を通して統一する<sup>19</sup>。ハイデガーは、この理性がもたらす統一をも、超越論的構想力の根源的統一の働きに由来するものだと捉えるのである。

この主張へと至るハイデガーの論拠を整理するならば、次のようになるだろう。第一に、「理性が『一個の全体の形式』(“Form eines Ganzen”)(KrV 832;860)を表象する」(GA3 152)からこそ、つまり理性が統一をもたらす働きを持つからこそ、それに応じて悟性にも、統一をもたらす働きが付与される。第二に、この理性が、そもそもこの理念の構築(das Bilden)において、構想的性格(Einbildungscharakter)を持っているからこそ、理性の統一の働きに応じて表象の統一を行う悟性も、構想的性格を持つのである。言い換えれば、ここでハイデガーが言わんとしているのは、理性とは、構想力にほかならないということである<sup>20</sup>。ここで、我々は疑問を抱かずにはいられない。推論することと、構想(=想像)することとは、同一とされてよいのか。カント自身においては、(思考の規則に従う)推論と、(思考の規則から自由である)構想(=想像)とは、同一ではない。カントは、理性が構築する超越論的理想は、構想力の産物(つまり「感性の理想」)ではないと明言している<sup>21</sup>。ハイデガーはしかし、この点を踏まえた上で、自らの解釈を擁護する。いわく、カントは「超越論的理想が経験的に生産的な構想力の所産であること」を拒否しているのみであり、それが「超越論的構想力」の所産であることは、排除してはいない(cf. GA3 152)。

ここに我々は、カント書における解釈の最大の魅力と同時に最大の「暴力性」を見出す。超越論的理想が認識の彼方に位置するということは、カント哲学にとって肝要である。ところがそれは、ハイデガーの解釈においては、認識能力の一つである超越論的構想力の産物となってしまうのである。これは、

---

<sup>19</sup> 「悟性は客体における多様を、概念を通して統一する。それと同様に、理性は理性の側から、概念の多様を、理念を通して統一する」(KrV A643;B672)

<sup>20</sup> ハイデガーによれば、悟性の「構想的性格」(Einbildungscharakter)は、悟性を理性として捉えることにより、より明らかになるとされる(「我々が、今到達された悟性の本質規定から出発して、純粋な自己意識に、またその本質にさらに近づこうと試み、悟性を理性として捉えようとするなら、そのとき、純粋思考が持つ構想という性格は、より明確なものとなるだろう」(GA3 151) )。なぜなら、そもそも理性は、「理念の構築」([das] Bilden der Idee)をなす能力であるからだとされる(cf. GA3 152)。このハイデガーの議論では、そもそも理性が構想力であるという主張の内容そのものが前提されているように思われる。

<sup>21</sup> 構想力の産物としての理想は、たしかに「可能な経験的直観の到達しえない範型」であるが、「定義や吟味ができないようないかなる規則をも与えない」(KrV A570;B598)。これに対し、「理性が理性の理想をもって意図するのは、ア・プリオリな規則に従って、網羅的に規定すること」であり、理性の意図する対象は、経験はそれに十分な条件を提供しないとはいえず、「原理に従って網羅的に規定されるはずの」ものである(KrV A571;B599)。

超越論的弁証論を超越論的感性論と超越論的分析論（とりわけ超越論的図式論）に回収してしまうことであろう。

## 第2節 カント書における解釈の『判断力批判』 「美の分析論」直感的反省的判断からの再理解

さて、以上に見たように、ア・プリオリな総合判断を存在論的認識（存在了解）として捉えるハイデガールの解釈は鮮やかなものだが、構想力を感性と悟性、さらに理性の根源とする説は、カントの設定した認識の限界を超えている。しかし、そもそも認識が問題とならない場合ではどうだろうか。ここで思い起こされるのが、カントが『判断力批判』第1部で扱う直感的反省的判断である。

### 1) ア・プリオリな総合判断である直感的反省的判断における超越論的図式論（前節1に対応）

カントが『判断力批判』第一部において直感的反省的判断として論じているのは、美しいという判断、大・中・小であるという判断<sup>22</sup>、崇高であるという判断である。カントは、この直感的反省的判断がア・プリオリな総合判断であることを強調する。まずこの判断は、主語（たとえば或る直観の対象）が、主観的に、主語の中には全く含まれていない述語（快・不快の感情）へと包摂されるという意味において、総合判断である<sup>23</sup>。また、直感的反省的判断がア・ポステリオリな総合判断だとすると、それはいかなる主観的普遍性もちえず、感覚判断と同じ、個々人の経験に依存する判断となってしまう。カントは美の分析論において、美の判断を、質、量、関係、様相の観点から論じ、この判断は、関心なき適意（質）、主観的普遍性（量）、目的なき合目的性（関係）、主観的必然性（様相）によって特徴づ

---

<sup>22</sup> カントは量の数学的判定と直感的判定を区別する。量の数学的判定においては、最大量が存在せず、無限の進行が行われる。量の直感的判定においては、最大量がある。カントによれば、「大」は純粹悟性概念ではない。しかし感官による直観でもなく、むしろ理性概念でもない（cf. KU §25）。言い換えれば、「大」は悟性（＝思考）の対象ではなく、感官による直観の対象でもなく、理性による推論の対象でもない。「これこれ大きい」と判断するとき、主語「これこれ」は述語「大きい」に包摂されるが、この述語は悟性概念ではない。つまり、この判断は、規定的判断（主語を包摂させるための述語が概念としてすでに与えられている判断）ではない。カントによれば、「大」は、「判断力の概念」（KU §25）である。しかしここで、理性は理性概念（＝理念）を形成し、悟性は悟性概念を形成するが、判断力は単なる包摂を行うのみの能力であるから、判断力が概念を形成するとは言えないのではないか、という疑問が浮かぶ。しかし、実は、そのように言うことは可能である。なぜなら、すでに与えられているような述語概念がない場合に、それを模索するのが反省的判断だからである。直感的反省的判断は、概念を感性によって模索し形成しようとするものだと考えることができるだろう。ただしそれは、客観的概念ではあり得ない。

<sup>23</sup> 「趣味判断〔つまり美の判断〕が総合的判断であるということは、たやすく洞察できる。なぜなら、趣味判断は、客体の概念や客体の直観をさえも超えて、まったく認識でさええないような或るもの、すなわち、快（或いは不快）の感情を、それ〔直観〕に述語として付け加えるからである。」（KU §36）

けられる。このうち美の判断が備え持つ主観的普遍性、主観的必然性は、この判断がア・プリオリでなければ成り立たないことの証左であるとされる<sup>24</sup>。以上の二つの理由により、直感的反省的判断は、ア・プリオリな総合判断なのである。

ここで以下の確認をしておきたい。直感的反省的判断において働く構想力は、経験的構想力ではないということである。カント自身がそれを超越論的構想力とは命名していないものの、あくまで超越論的哲学が視野に置かれているという意味において、我々はこれを超越論的構想力と呼ぶべきである。ただしここで「超越論的」という語は、認識の成り立ちに関わるという狭義の意味での「超越論的」という語と区別するものとする。カントは言う。「かくして、判断力批判の課題は、超越論的哲学の一般的問題に属することになる。つまり、いかにしてア・プリオリな総合判断は可能であるのか、という問題である」(KU §36)。つまり、ハイデガーがカント書で問うた、存在了解としてのア・プリオリな総合判断がいかにして可能かという問題は、純粹認識判断においてのみでなく、直感的反省的判断においても解明されることが期待できるのである。

では、この判断においては、ハイデガーが純粹認識判断において見てとった、存在論的認識をあらわにする超越論的図式論は、展開されているだろうか。カント自身は『判断力批判』において、図式という言葉を用いない。彼は、認識判断において概念を直観化する「図式」に対比させて、美の判断においては、「象徴」の概念を導入する。カントにおいて、直観化つまり「感性化」(Versinnlichung)には、「図式」と「象徴」の二通りがある。図式は、概念に対して直観が与えられるとき、象徴は、理念に対していかなる直観も与えられようがないので、その代用として、その理念と規則において類似している対象の直観が与えられる場合に、用いられる術語である(cf. KU §59)。また、認識判断において、「図式的」(schematisch)、「機械的」(mechanisch)に行われる、主語の述語への包摂に対して、直感的反省的判断においては、包摂が「技術的」(technisch)、「技巧的」(künstlich)になされることも論じられている<sup>25</sup>。このように、認識判断において用いる「図式」という語を、直感的反省的判断においては用いないように注意を払っているように見えるカントであるが、時折、この直感的反省的判断においても、「図式」という言葉をなおも用いている。その例が、第35節にて、この判断についてカントが説明しながら用いる、「構想力がいかなる概念もなくして図式化すること」(„daß die Einbildungskraft ohne Begriff schematisiert“)(KU §35)という表現である。認識判断の場合は、規定された概念を前提とする概念の感性

<sup>24</sup> 「(表象に結び付けられた自らの快という) 述語は、経験的である。にもかかわらず、趣味判断は、あらゆる人に同意が要求される限りにおいて、やはり、ア・プリオリな判断なのである、或いは、そのように捉えられることを求めている」(KU §36)。直感的反省的判断をア・プリオリな総合判断と特徴づけるカントに対して、これをア・ポステリオリな総合判断であるとする反論は可能であろう。ただし、ア・ポステリオリな総合判断は経験的心理学が扱う問題であり、超越論的哲学の問題ではなくなってしまうため、カントはこれを扱わないのである(cf. KU §41「美に対する経験的関心について」)。

<sup>25</sup> Cf. AA XX 213f.

化として、図式が構想力により産出される。対して、直感的反省的判断においては、概念なき図式化、つまり、未規定的な概念の感性化として、図式が構想力により産出されるのである。実際カントは『判断力批判』第一序論「VIII 判定能力の感性論について」(Von der Ästhetik des Beurteilungsvermögen)にて次のように説明する。判断力における構想力と悟性の関係は、認識判断のように客観的に考えられるのみならず、主観的にも考えられ、構想力と悟性の関係が、一方が他方を促進したり妨害したりすることで心が触発されることによって、感覚可能(empfindbar)になる(cf. AA XX 223)。この感覚は、「判断力を通して悟性概念の感性化に主観的に結び付けられている」(subjektiv mit der Versinnlichung der Verstandesbegriff durch die Urteilskraft verbunden)と言う(AA XX 223)。これはまさに、上に見た、ハイデガーが図式を説明する際に用いた「純粹概念の感性化」(Versinnlichung der reinen Begriffe)(GA3, §19, S. 91, 再掲)という言葉と重なり合うのである。

この概念なき図式化は、構想力によって経験的に再生産されるものではなく、ア・プリオリに産出されるものである。この限りにおいて、(カント自身は「超越論的図式論」という語を認識判断の場合に限って用いているとはいえ)我々は、この概念なき図式化についてのカントの教えを、広義の意味で超越論的図式論と呼ぶことができる。これこそまさに、ア・プリオリな総合判断はいかにして可能かという問いに答えるものである。ここで図式は概念の感性化を行うとされるが、この概念それ自体は未規定的であり、概念の形式のみがある。よって、概念の図式化ではなく、概念の形式の図式化がなされていると考えるべきである<sup>26</sup>。では、ここに純粹直観はあるのか。それを次に見よう。

## 2) 概念なき図式化において起こる自己触発としての時間 (前節2に対応)

重要であるのは、直感的反省的判断においては、この判断が「S=P」(例えば「この花は美しい」)という形をとるにもかかわらず、主語である直観の対象と、述語である快・不快の感情の結合が問題となっているのではない、ということである。直観において供される存在者は、この判断のきっかけではあれ、構成要素ではない。快・不快の感情は、構想力の対象であり、それによって心が触発される時、心は心自身を感じているとされるのである。カントは言う。「快・不快の感情への〔関係〕を通しては、客観における何ものかが指示されているのではまったくない。この関係においては、主観が、表象を通して触発されるがままに、自ら自身を感じているのである」(KU §1)

直感的反省的判断(例えば美しいという判断)において、感性が何らかの存在者を受け取り、悟性がそれについて考えるという役割分担は消滅する。そもそも感性が外部から受け取られる存在者が、心を触発するのではない。これこれの存在者を外部から受け取るとは、感性によって直観するというこ

---

<sup>26</sup> すなわち、目的の概念を欠いた、合目的性という、概念の形式のみが、図式化されるのである。

ある。感性的直観によって受け取られたものは、悟性概念と結合して、認識判断となる。しかし、直感的反省的判断において。感覺的快とは異なる快が感じられるとき、その快は、認識されるのではなく、構想（想像）されている。構想（想像）されるものは、実在するものではない。実在する何らかの存在者から触発されるのではないにもかかわらず、私の心は変様を受ける。構想力の働きにより、心は自らで自らを触発しているのである。

かくして、直感的反省的判断は心の心による自己触発であるということ、そこでは、（見かけに反して）経験的直観も、また、概念も関わることなくして、図式化が遂行されるということが確認された。では、ここにおいて、純粹直観はなされているのか。我々の考えでは、なされている。というのも、いかなる存在者をも受け取るのではない心の変様として自己触発がなされている限りにおいて、この自己触発は、ハイデガーが捉えた意味での時間の湧出にほかならないからである。カント自身は『判断力批判』において、時間を体系的には論じていないが、時間についての記述が散見されないわけではない。ここで、美の判断（構想力と悟性の共働）ではなく、崇高判断（構想力と理性の共働）について語られる章（第一部第一篇第二章）における、時間への言及を参考に、美の判断における時間について考察してみたい。

崇高判断について説明するに当たって、カントは、大・中・小であるという判断について述べている。崇高判断は、この大が比較を絶して大である時、すなわち直感的に（数学的にではなく<sup>27</sup>）無限である時に、下される判断である。ここで、直感的に捉えられる意味での有限と無限が区別できる。さらにカントは、この崇高判断において、「把捉」(Auffassung)と「総括」(Zusammenfassung)という二つの構想力の働きを区別する。把捉とは、構想力の「前進」運動であり、総括とは、構想力の「背進」運動であるとされる。構想力による把捉における前進は、「時間的条件」に従うとされるが、この時間的条件とは、「時間的継起」である。それに対して、構想力による総括における背進は、時間的継起において前進的に対象を把捉するのではなく、すでに把捉されたものを一つの瞬間へと総括するという意味におい

---

<sup>27</sup> 上記の註 23 を参照。

て、この時間的継起という条件に「暴力」(Gewalt)を課すものであるとされる<sup>28</sup>。これが、崇高判断において、構想力が自らに課す暴力である<sup>29</sup>。

ここで、直感的量判定における無限（すなわち直感的な意味での最大量）にまだ達しない<sup>30</sup>範囲内での（すなわち直感的に有限な）大・中・小であるという判断を考えるならば、この判断は、総括にいたらない把握、つまり時間的継起に従う前進であると考えることができる。つまり、崇高判断を除いた直感的反省的判断における自己触発は、有限な時間の湧出そのものであると結論できる<sup>31</sup>。認識判断において量の範疇が現象へと適用される際、『純粹理性批判』の超越論的図式論によれば、時間系列としての超越論的時間規定が図式として働くのであった。大・中・小の判断における構想力の把握は、認識判断における時間系列とよく似ているように見えるが、主観的、直感的に捉えられるものである限りにおいて異なる。主観的であるにとどまる直感的反省的判断において、構想力は、客観的な時間として構成される以前の、自己触発としての時間を湧出するのだと考えられる。

以上により、ア・プリオリな総合判断である、崇高判断を除く直感的反省的判断の解明が、広義の超越論的図式論を展開していること、そこでは心の心による自己触発が認められること、それは根源的に有限的な時間の記述であることが確認された。カント自身は上述のように、根源的時間性と派生的時間性を区別はしないが、ハイデガーによるこの区別は、『判断力批判』における、認識以前の心の変様を根源的時間性と捉えることにより、可能となると考えられるのである。

### 3) 直感的反省的判断においては〈感じること〉が〈考えること〉と一体であること（前節3に対応）

---

<sup>28</sup> 「空間の（把握としての）測定は、同時に、その空間を描くことである。したがってそれは、構想における客観的運動であり、前進である。それに対して、多性を統一性へと総括すること——思考の統一性ではなく、直観の統一性へと総括すること——、したがって、継続的に把握されたものを或る瞬間へと総括することは、背進である。この背進は、構想力の前進における時間的條件を撤廃し(wieder aufheben)、同時存在を直観的に表示する。それゆえ、総括は、（時間的継起は、内感と直観の条件であるので）構想力の主観的な運動である。この運動を通して、構想力は、内感に暴力をふるう。この暴力は、構想力が一つの直観へと総括する量(Quantum)が大きければ大きいほど、顕著なものであるはずである。」(KU §27)

<sup>29</sup> このカントの議論は、しばしば参照される。たとえば、リシールは、この箇所から独自の超越論的図式論を再構築しようとする。また、ロゴザンスキーは、この構想力の暴力を、総合そのものが持つ暴力と捉える(Jacob Rogozinski, „Le don du monde“, in: Courtine et al., Du Sublime, Belin, 198)。ロゴザンスキーは構想力の暴力を強調するが、この暴力は、理性が構想力に課すからこそ、構想力が自らに課さざるを得ないものである。それは、絶対的に他的なものから自己がこうむる暴力であると我々は考える。

<sup>30</sup> 上述のように、カントは、量の数学的判定と直感的判定を区別する。数学的判定においては、最大量が存在しないため、より大きな量へと無限に進行しうる。それに対して、直感的判定においては、比較を絶する大という最大量がある。理性が形作る無限の理念は、構想力によって、直感的に無限なものとして構想される。

<sup>31</sup> ロゴザンスキーの言葉を援用するなら、把握においては、時間がその連続性において捉えられ、総括においては、時間がその非連続性において捉えられると考えられる。Cf. „Le don du monde“, in: Courtine et al., Du Sublime, Belin, 198

ここでさらに、直感的反省的判断においては、感性と悟性が分断されず、一体となっていることを示したい。カントは、上述のように、『判断力批判』第一序論「VIII 判定能力の感性論について」において、構想力と悟性が、一方が他方を促進したり妨害したりすることにより、構想力と悟性の関係が感覚可能になるとするが、それに続けて、さらに以下のように言っている。「さて、この感覚は、客体の感性的表象ではない。しかしそれでもこの感覚は、やはり、判断力によって悟性概念の感性化〔つまり図式の働き、上述〕と主観的に結びついている限りにおいて、かの能力〔判断力〕の作用を通して触発される主観の状態の感性的表象として、感性のうちに数えられることができる。また、判断は直感的、すなわち感性的〔…〕と名付けられうるのである。それは、判断することが（すなわち客観的には）（上級認識能力一般としての）悟性の行いであって、感性の行いではないにもかかわらず、そうなのである。」(AA XX 22)

ここでカントは、判断することは、本来は客観的なものとして、悟性の働きに属し、感性の働きではないはずなのだが、直感的反省的判断は、感性的なものとして名付けられると言っている。実際、何かを美しいと感じることと、何かを美しいと思う／考えることを、区別することはできない<sup>32</sup>。直感的反省的判断において、感じることと考えることは一体をなしているのである。ここで構想力は、〈感じること〉と〈考えること〉が分離する以前の段階で働いていると考えることができる。言い換えれば、ここでこそ、ハイデガーが言うように、構想力が、感性と悟性の共通の根となっていると考えられるのである<sup>33</sup>。

#### 4) 直感的理念を描く構想力（前節の4に対応）

ここでさらに、ハイデガーがカント書で語る、超越論的理想を超越論的構想力の産物として捉えるという解釈が、直感的反省的判断において成り立つか否かを検討したい。ここで想起されるのが、美の理想について語られる第17節と、直感的理念について語られる第49節である。ここでは第49節に着目する<sup>34</sup>。

---

<sup>32</sup> 同様に、何かを大・中・小であると感じることと、そのように思う／考えることも、区別できない。

<sup>33</sup> これに対して、例えば「この花は赤い」という認識判断を考えてみると、赤いと感じること（外部感官を通して感性的直観を持つこと）と、赤いと思うこと（赤の概念を思考において持つこと）は、別の事柄であることがわかる。

<sup>34</sup> 第17節によれば、構想力が構想する美の理想は、それが美の理想を個において具現するものである限りで、純粋な美の判断が持つような主観的合目的性としての自由を失い、概念として規定可能な客観的合目的性（すなわち道徳性）へと固定されることとなる。よって、それはもはや直感的反省的判断の領域を超え、論理的反省的判断であるような(cf. AA XX 235, 250)、目的論的判断につながるものである。これについては、第三節で立ち戻りたい。

第 49 節においては、理性理念の対であるような「直感的理念」(ästhetische Idee)が語られている。この理念は、多くを考えさせる構想力の表象であるにもかかわらず、いかなる規定された思考も、つまりいかなる概念も、それに合致することができないものであるとされる。それゆえ、いかなる言語も、完全にはこの理念到達することがなく、またこの理念を理解可能なものにすることもできない。このような直感的概念は、理性理念に対する私たちの欲望に、感性的な形式を与えるとされる(cf. AA V 314)。

認識判断の場合は、真偽、つまり、真理と仮象との区別があり、よって、超越論的理想は仮象であるし、いわんや、認識判断の範囲内で、超越論的構想力が超越論的理想に到達するとは考えられない。それに対して、直感的反省的判断においては、真理や仮象といったことはまったく問題にならない。たとえば何かを美しいと判断することは、その美しさがそもそも実在するものではない限りにおいて、錯覚であるとか錯覚でないとかいうこと自体が該当しない。それは構想(想像)の対象なのである。ハイデガーがカント書において超越論的構想力の産物と捉えた超越論的理想は、これを直感的反省的判断において構想力が構想する(理性理念の対としての)直感的理念として捉えるならば、意味を持つはずである。そこでは、超越論的仮象を取り除くという超越論的弁証論の課題は不必要となるからである。

- 5) あらゆる規定的判断は反省的判断を前提すること、また、認識判断はその原始的段階においては直感的反省的判断として捉えられること

さて、この直感的反省的判断こそ、そもそも、あらゆる規定的判断が前提するものであると我々は考えることができる。なぜなら、既存の概念を前提とし、それを述語としてその下に主語を包摂する規定的判断は、概念を前提することなく模索する反省的判断なくしては、確立され得ないからである<sup>35</sup>。また、カントは言う。あらゆる認識判断は、その原初においては、直感的反省的判断であったと<sup>36</sup>。

かくして、あらゆる認識判断の起源には直感的反省的判断があるとなれば、そしてこの直感的反省的判断においては、感性と悟性とが、構想力を根として一体となっているならば、ハイデガーのカント書での解釈が、ここにおいてこそ、精彩を放つと考えられるのである。

### 第 3 節 超越論的構想力としての理想——カントからニーチェへ

---

<sup>35</sup> 『純粋理性批判』での言葉を用いれば、「理性の必当的使用」(特殊を普遍に包摂すること)は、「理性の仮設的使用」(特殊から出発して、それが包摂されるべき普遍を探すこと)によってまず普遍が模索されることがなければ、そもそもなされえない。 Cf. A646-647; B674-675.

<sup>36</sup> 『判断力批判』序論、VI 「快の感情が自然の合目的性の概念と結合していることについて」 AA V 187. Cf. Derrida, Economimesis, in: Mimesis des articulations

さて、これまで我々は、カント書で展開される解釈（1. ア・プリオリな総合判断における超越論的図式論、2. 自己触発としての根源的に有限的な時間、3. 感性と悟性の共通の根としての構想力、4. 超越論的構想力により産出される理想）が、『純粹理性批判』における認識判断においてよりもむしろ、『判断力批判』「美の分析論」における直感的反省的判断と重ね合わせるときにこそ、成り立つと考えられることを確認した。しかし、ハイデガー自身は、カント書での解釈を『判断力批判』に結び付けることをしていない。かろうじて『ニーチェ』に所収されている講義「芸術としての力への意志」（1936-37年冬学期講義）の一節がその可能性を示唆してくれるのみである。この節でハイデガーは、カントによる「美の分析論」（質・量・関係・様相からの考察）のうち、質からの考察、すなわち、美は関心なき適意として表象されることに触れ、これは、ニーチェの美についての主張（美は陶酔に基づく）に相反しないどころか、一致するのだと論じる<sup>37</sup>。とはいえ、ハイデガーはあえて『判断力批判』の議論に深入りしない。さらに講義「認識としての力への意志」（1939年夏学期講義）では、カント書が描いていた、理性の起源としての超越論的構想力の概念を、むしろニーチェとの対話の中で展開している。というのも、ここでこそハイデガーは、「理性は超越論的構想力そのものとなる」（„Sie [die Vernunft] wird zur [...] Einbildungskraft schlechthin“)と宣言するからである(cf. GA6-1 527)。ハイデガーは、「理性の詩作的本質は、カントが初めて彼の超越論的構想力についての教えの中で、固有に見たのであり、考えとおしたのである」（GA6 1 526）とした上で、「理性の詩作的本質」を看取するニーチェを、カントの延長線上に位置づける。ここで、推論の能力と構想（想像）の能力が一つであることは、ニーチェの読解からこそ議論されることになる。本節では、なぜハイデガーが、カント書での議論を、『判断力批判』ではなく、むしろニーチェとの対話によってこそ、発展させるのか、その理由を考察する。

すでに見たように、ハイデガーはカントの自己触発の概念を、時間を根源的に有限的なものとして捉える試みとして解釈する。しかし他方で、ハイデガーは、1927-28年のマールブルク大学冬学期講義から、繰り返し、カントにおいてはこの有限性が、いまだ十分には根源的でないことをも強調している<sup>38</sup>。この文脈でハイデガーが言及するのが、超越論的理想にはほかならない<sup>39</sup>。ハイデガーにとって、超越論的理想を、確かに認識の対象とは認めないとはいえ、いまだ実践において措定するカントは、時間をほ

---

<sup>37</sup> Cf. 「美についてのカントの教え」 GA6-1 112.

<sup>38</sup> ハイデガーによれば、カントにおける人間の有限性は、外的に規定された、被創造者としての有限性にとどまっている(cf. GA25 409)。

<sup>39</sup> Cf. GA25 416. ハイデガーによれば、カントは、創造する根源的直観 (*intuitus originarius*) を基準に、有限的認識を査定している。つまり、カントの語る人間の有限性は、無限の実体から捉えられるものであることになる。つまり、超越論的理想こそが、人間の有限性を有限性として捉えるための基準となっているのである。

かならぬ自己触発そのものからのみ捉えることにいたっていないことを意味する<sup>40</sup>。ハイデガーのカント批判の要点は、カントが根源的有限性の哲学の可能性を展開しているにもかかわらず、その有限性をやはり実践においては無限との対照によって捉えていると主張することにある<sup>41</sup>。

ここで触れたいのが、崇高判断と目的論的判断である。ハイデガーは『ニーチェ』講義において『判断力批判』を高く評価しながらも、崇高判断や目的論的判断へと議論を展開しない。理由は、上述のことと関係していると思われる。『判断力批判』は、美の判断としての直感的反省的判断から出発し、崇高判断としての直感的反省的判断の議論を経て、目的論的判断としての論理的反省的判断へと通じる。これは、ハイデガーにとっては、いまだ（至高的存在者についての学という意味で）存在神学的-形而上学的であったと考えられる<sup>42</sup>。それは存在の彼方の領野であり、存在の問いとは結び付かないのだ<sup>43</sup>。

ハイデガーは、カントの崇高判断や目的論的判断の批判が、自らの存在についての思索を展開する上で、すなわち存在神学としての形而上学の解体を遂行する上で、適していないと判断したのではないだろうか。理性を超越論的構想力として捉え直すハイデガーにとって、美の分析論のみが、受け入れられる範囲に属していたのではないだろうか。構想力を根本概念として形而上学を解体するという企図は、カントよりもニーチェとの対話へとハイデガーを向かわせたと考えられるのである。

## 結論

以上、ハイデガーが『カント』書で示す解釈のうち、四点（1. ア・プリオリな総合判断についての超越論的図式論、2. 自己触発としての根源的に有限的な時間性、3. 感性と悟性の共通の根である超越論的構想力、4. 超越論的構想力として捉え直される理性）を確認した上で、これらの解釈が、『判断力批判』「美の分析論」において論じられる直感的反省的判断においてこそ、成り立ちうることを示した。ハイデガーがカント書にて存在了解として解釈した純粹認識判断と異なり、直感的反省的判断は、規定の概

---

<sup>40</sup> Cf. GA25 418. ハイデガーによれば、カントは産出的構想力のうちに、根源的に脱自的な時間性を見出すにはいたらなかったとされる。

<sup>41</sup> GA25 155. ハイデガーは強調する。現存在が現存在として有限であるということを示すためには、神（超越論的理想）は前提する必要はなく、直観と思考が、それ自身で有限であることが理解されるべきなのであると。

<sup>42</sup> ハイデガーは、「カント哲学」は「プラトニズムの形態」に到達したとする。彼は言う。「超感性的なものは、いまや実践理性の要請となった」（GA06-1, 208）。

<sup>43</sup> 以上のハイデガーの解釈は、カントの一方の部分に徹底的に忠実であろうとするからこそ、他方の部分に関して忠実でないことをあえて受け入れるというものであると考えられる。一方の部分とは、超越論的構想力を考えることによって、経験的心理学からも形式的論理学からも捉えられなかった認識の構造を明らかにすることである。他方の部分とは、超越論的理想は、あくまで論理的反省的判断（「この宇宙は...のためにある」「私は...のために実存している」といった目的論的判断）における未規定的な理念であり、直感的反省的判断によって捉えられるものではないということである。

念を前提しない。つまりここでは、存在了解は、もはやいかなる概念をも前提とせず、認識ではない。ただし同時にそれは、あらゆる認識判断の前提となるものである。

たしかに、「これは美しい」(Das ist schön)という判断が下されるとき、そこには、いかなる存在者からの触発とも異なる形で、存在(“ist”)が生成する。それは存在者を受け取る感性の働きでもなく、概念を形成する悟性の働きでもなく、むしろ両者の根源となる、超越論的構想力の働きによる。

このような解釈に基づくならば、ハイデガーが目指す存在への問いは、もはや、一般的概念によって説明可能な存在についての「学」(存在論)ではなくなることになる。学ではなく、構想(Einbildung)―詩作(Dichtung)においてこそ、存在の運動そのものとの出会いが語られうることとなる。最後に、ハイデガーがプラトン『パイドロス』の読解で語っている言葉を引用して、この発表を終えたい。

「美は、我々に最も直接的に到来し、我々を魅惑する。それは存在者として我々を打ちながら、同時に、我々を存在への眼差しへと向かわせる。 […] 美は、存在忘却から我々を引き離し、在への眼差しを与える。 […] それは存在を光り輝かせる […]」(GA6-1 199-200)。